サン・テグジュペリ

夜間飛行
南方郵便機

モーリヤック

蝮のからみあい
テレーズ・デスケイルゥ

堀口大学 鈴木健郎 杉捷夫 訳

河出書房

世界文学全集 Ⅲ-16 サン・テクジュペリ モーリヤック

© 1969

編集委員
阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和40年3月10日 初版発行
昭和44年4月1日 再版発行

定価 430円

訳者 堀口大学 鈴木健郎 杉捷夫
発行者 中島隆之
印刷者 草刈竜平
装幀 原弘
印刷・中央精版印刷株式会社
製本・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区神田小川町三の六 株式会社 河出書房新社
電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目　次

サン・テクジュペリ
夜間飛行……一
南方郵便機……六九
モーリヤック
蝮のからみあい……一六三
テレーズ・デスケイルゥ……三三五
年　譜……四三三
解　説……（中島　健蔵）…四四一
付　参考地図

夜間飛行

サン・テクジュペリ

堀口大学訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ディディエ・ドーラ氏に

序

航空輸送会社は、他の輸送機関と快速をきそう必要があった。小説『夜間飛行』の主人公、非凡な性格者、会社の支配人リヴィエールは、この点をつぎのように説明する、「せっかく、汽車や汽船に対して、昼間勝ち優った速度を、夜のあいだに失うということは、実に航空会社にとっては、死活の大問題だ」今日ひろく行なわれている夜間定期飛行は、その当初にあっては、ひどく論難攻撃され、やがてわずかに認容され、その後、危険な実験時代をへて、ようやく今日の実用化を見るに至ったものだが、この小説に取り上げられている時代には、なおきわめて冒険的な事業であった。不慮の災厄に満ちた航空路の、予測しがたい危険に加えるに、「夜」というものの不実な神秘性までが荷担したものだ。だがぼくは急ぎつぎのことをいっておこうと思う。すなわち夜間飛行の危険性は、今日なおきわめて大きいとはいうものの、それとても、一度は一度と経験を積むに従ってその安全性を増大し、危険率は一日一日減少しつつあると。しかしまた、人跡未踏の蛮地の探検と等しく、航空事業にあっても、英雄的な初期の時代があったわけだが、あたかも空のパイオニアのひとりの劇的冒険を描いてぼくらに見せてくれるこの小説『夜間飛行』は、その当然の結果として叙事詩風な作品となっている。

ぼくは、『夜間飛行』の作者サン・テクジュペリの処女作も好きだったが、今度の作の方が、より以上に好きだ。先の処女作『南方郵便機』にあっては、生なましい飛行家の追憶に、恋愛事件がからんで主人公を読者に接近させる。愛情に対して感じやすいあの主人公が、ああ！　なんとぼくらに、人間的な、そしてまた傷つきやすい性格だと感じられることか。ところが、『夜間飛行』の主人公は、非人情になることなしに、自分を超人間的な美徳にまで高めている。この生彩ある小説にあって、一番ぼくの気に入るのは、その崇高な点だ。人間の弱点や、ふしだらや、自堕落なぞは、世人の親しく見聞して知っているところでもあり、また今日の文学が、あまりにも巧みに描写提示してくれるところでもある。それに反して、人間の緊張した意志の力によってのみ到達できるあの自己超越の境地、あれこそ今日ぼくらが知りたいと思うところのものではないだろうか。

作中の操縦士の人物もさることながら、ぼくは、その

上役、支配人リヴィエールの人物により多く驚嘆する。彼は自分では行動しない、しかし他人に行動させる。彼は配下の操縦士に、自分の美質を吹き込み、そのかわり、彼らから、その能力の最大限度を要求し、彼らに偉功を立てさせる。彼の一徹な決定の前には、弱気はいっさい許されない、またどんな小さな過失も彼はかしゃくなく処罰する。彼の厳格さは、一見、非情無道とさえ思われる。しかしその厳格さは、人間に向けられるのではなく、人間の持つ欠点に向けられるのであって、彼は人間の欠点を矯正しようといい張るのだ。このことを描いた部分を読む読者は、作者のこの性格に対する賞賛の念をありありと感じるはずだ。ぼくは特に作者に対し、自分にとってきわめて重大な心理学的重要性を持つ逆説的な真理、――すなわち人間の幸福は、自由の中に存在するのではなく、義務の甘受の中に存在するのだという事実を、明らかにしてくれた点に感謝する者だ。この小説中の人物は、みながそれぞれ、その義務とする危険な役割に、全身的、献身的に熱中し、それを成就したうえでのみ、彼らは幸福な安息を持ち得るのだ。また読者には、リヴィエールが、けっして非情な人間ではなく、（彼がゆくえ不明になった操縦士の妻の訪問を受けるくだり以上に感銘深いものはまたとありえない）彼がある一つの命令を下す場合、部下の操縦士がこれを実行する以上の勇気を要するのだということが読者に感知される。

彼はいう、「愛されようとするには、同情さえしたらいいのだ。ところが、ぼくはけっして同情はしない、いや、しないわけではないが、外面に現わさない……ぼくはときどき、自分の力に自分ながら驚くことがある」彼はまたいう、「部下の者を愛したまえ、ただ彼らにそれと知らさずに愛したまえ」

これらの言葉も要するに、義務の観念が、「愛より大きい力を持った隠れた義務の観念が」リヴィエールを支配しているからだ。要するに、人間というものは、自らのうちにその極致を見いだすものではなく、人間を支配し、人間によってのみ生きるあるものに従属しその犠牲となるべきものであるからだ。ぼくはこの小説の中に、ぼくの書いたプロメテをして、逆説的に、「自分は人間を愛さないが、人間を滅ぼすものを愛するのだ」といわせたあの「隠れた観念」を見いだすのをうれしく思う者だ。これこそあらゆる勇壮な行為の源泉ではあるまいか。リヴィエールは考える、「ぼくらはあたかも何ものかに、人間の生命以上の価値が存するかのごとく行動しているが……。果たしてそれは何ものであろうか？」作者はまたいう、「人間の生命にくらべて、より永続する

救うべき何物かが存在するのかも知れない。ひょっとすると人間のこの部分を救うために、リヴィエールは働いているのかも知れない」と。もとよりそれに相違あるまい。

科学者が、未来の戦争の災禍として、今日われらに示すものから察するに、どうやら人間の武勇の美徳のごときは今後用い所もなくなりそうで、武勇の精神がようやく軍隊から失われようとしている現在、人が人間の勇気の最もはなばなしく、最も有効に発揮される場合を見るのは実に航空事業においてではあるまいか？　与えられた命令を遂行するだけの行為にあっては、大胆も不敵もないわけだ。だが絶えず生命を危険にさらしている操縦士にとっては、普通世人が「勇気」と呼ぶものに対して抱く観念を、冷笑する権利が大いにありそうだ。サン・テクジュペリは、ここにぼくが、すでに今では古くなった彼の手紙の一節を引用することを許してくれるだろうか？　それは、彼がまだ、カサブランカ―ダカール間の連絡に従事して、モーリタニアの上空を飛行していた当時のものだ。

〈ゆくえ不明になった同僚の捜索や、敵地に不時着した僚機の修理や、ダカール行の郵便飛行やで、この二、三か月たいそう多忙でして、ぼくはいつになったらフランスへ帰れるか見当がつきません。

最近、ぼくは小さな手柄を立てました、――というのは、一台の飛行機を救い出すために、十一人のモール人とひとりの機関士を伴って二日二晩すごしたことです。その間、さまざまな、そして危険な出来事がありました。おかげでぼくははじめて、自分の頭の上を敵弾が口笛を吹きながら飛ぶのを聞きました。これでやっと、ぼくに、自分があんな環境に置かれた場合、どんなふうに行動するかがわかったわけですが、いずれにしてもモール人よりはよほど冷静です。同時に、ぼくに、久しく不審でならなかったあることがわかりました、――というのは、プラトンが（否、アリストテレスかも知れませんが）、勇気をなぜ美徳の最下位に置いたかということです。勇気というやつは、大して立派な感情からできてはおりません。憤怒が少々、虚栄心が少々、強情がたっぷり、それにありふれたスポーツ的楽しさが加わったというだけのしろものです。肉体的な力の激昂はたいしたものですが、これはあいにくなんの役にも立ちません。いずれかといえば、むしろ愉快です。これが夜の出来事ですと、非常にばかなことをやらかしたという気持が一つ加わります。今後ぼくは、単に勇気があるというだけの男なら絶対に尊敬はしないつもりです〉

この引用文の題言(エピグラフ)として、キントンの書から（ぼくがこの哲学者の説に感心しないことは相変わらずだが）引いた格言を置きたいと思う、いわく、

「恋愛と同じく、人は自分が勇敢だという事実を隠したがる」または、もっと適切に、「勇敢な人間は、金持がその慈善を隠すと同じく、その行為を隠す。彼らはその行為に変装させるか、でなければそれを詫(わ)びたい気持になる」

サン・テクジュペリは、この小説の中に取り上げた事柄は、何もかも知りつくして書いている。絶えず危険に遭遇してきている彼の体験が、彼の書いた小説に、模倣しがたい実録的な興味を与えている。ぼくらは今日まで、無数の戦争小説や架空の冒険を取り扱った小説を与えられてきたが、それらの作品にあっては、作者が時にその才能に弾力性のあることを立証するくらいが関の山で、これを読む真の冒険家や実戦家の笑いを買うのを禁じ得なかった。文学的価値からいってもぼくの大いに推賞するこの小説は、他方実録としての価値をも持つ。かくも不可分的に合わせ備わるこの二つの特色が、『夜間飛行』に、その例外的な重要性を付与している。

アンドレ・ジイド

1

機体の下に見える小山の群れが、早くも暮れ方の金いろの光の中に、陰影の航跡を深めつつあった。平野が輝かしくなってきた。しかもいつまでも衰えない輝きだ。この国にあっては、冬がすぎてから、雪がいつまでも平野に消え残ると同じく、平野に夕暮れの金いろがいつまでも消え残るならわしだ。

遠い極南の地から、ブエノス・アイレスへ向けて、パタゴニア線の郵便機を操縦してきた操縦士ファビアンは、港の水面同様、あたりの静けさと、平穏な雲が描き出す、かすかなひだのあらわれに、夕暮れが近づいたと知るのであった。彼は今しも、広やかな幸福な入り江に向かって進みつつあった。

この静けさの中にあって、彼は自分が、牧人のような、静かな散歩をしているのだと思うこともできたはずだ。パタゴニアの牧人たちは、悠々と、一つの羊群から他の羊群へと見回って歩くのだが、空の散歩者・彼ファビアンは、一つの市から他の市へと行くのだから、いわば小さな市々の牧人だ。たいてい二時間おきに、彼は、大河の岸べへおり立って水を飲んだり、平野の牧草を食べたりしている市々に出会うのだった。

ときどき、海の上よりなおいっそう人影まばらな草原を、百キロメートルもすぎたところに、ぽっつりと、迷い子のような農家が一軒立っているのに行きあった。彼がその機の翼で一礼して行き過ぎようとすると、この船とも見える一軒家は、牧原のうねりのなかに、人間の積み荷を乗せて、後方へと走り去るらしかった。

「サン・ジュリアン視界にあり。本機は十分以内に着陸す」

機上の無電技師はこの報知を、沿線の各局に発信した。南米大陸の南端マジェラン海峡からブエノス・アイレスにいたる、二千五百キロメートルの沿線に、同じような飛行場は数多く並んでいるのだが、このサン・ジュリアンの飛行場は、昼と夜との国境に位していた。いわばアフリカ内地における最前線の帰順部落のようなもので、ここから先は、暗黒な神秘の世界になるのだ。

後席にいる無電技師が、操縦士に紙片を渡した。

――雷鳴はなはだしく、レシーヴァは空電に満つ。飛

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

行を中止してサン・ジュリアンに一泊してはいかが？」

ファビアンは微笑した。見はるかしたところ、空はプールの水のように平静だった、彼らの前途の飛行場からは、「快晴、無風」を報じてきていた。彼が答えた、

――続航しよう」

無電技師は思った、果実の中に虫がひそむように、雷雨がどこかにひそんでいるのだと、だから今夜は、見かけはこんなに立派でも、実は痛んでいるはずだと。いまにもくさろうとしている夜という名のこの暗い影の中へ飛び込んで行くのが、彼には気味悪かった。

発動機の回転をおとして、サン・ジュリアンに着陸しながら、ファビアンはあるもの憂さを感じた。人間の生活を和らげてくれるあらゆるものが、彼に近づきながら拡大されつつあった。彼らの家、彼らのコーヒー店、彼らの散歩道の並木、等々がそれだ。彼の気持は今、征服の日の夕暮れに、自分の大帝国の領土の上にうなだれて、人のつつましやかな幸福をそこに見いだした征服者のそれに似ていた。ファビアンは今、武器を投げ出し、自分の気だるさと節々の痛さを感じ、貧しさも富の一種だと知って、この土地に住む素朴な人間になり、変わることのない景色を窓からながめて暮らしたい気持だった。この小っぽけな村に住むこと、それさえ彼は受け入れたはずだ、一旦やりたいことをなしとげたあとなら、人は生活上の偶然を受け入れて、それを愛することも可能なはずだから。それは恋愛のように、人を盲目にしてしまう。ファビアンは、長くこの土地に住みついて、この土地の永遠の一部に参加したいとさえ思ったはずだ、なぜかというに、一時間足らずの短い時間を彼がすごす小さな市々と彼が横ぎる古い壁をめぐらした庭園とは、彼にはどうやら、自分には関係なしに、永久に存在するもののように思われるからだ。見ると村は機体に向かって上昇し、彼に向かって開けてきた。するとファビアンの思いは駆けめぐる、友情だの、やさしい女たちだの、白いテーブル・クロースをあいだにはさんだ差し向かいの食事だの、すべて、いつとはなしに永久に身に慣れるもののうえを。今この村は、早くも機翼とすれすれに流れていた、壁が保護しない閉ざされた庭園の神秘をさらけ出して。ところが、いよいよ着陸して見ると、ファビアンには、石壁のあいだに静かに動いていた二、三の人間以外には、自分が何も見なかったことに気がつくのだ。村は、自分の不動性を唯一の武器に、自分の愛情の秘密を守りつづけるのだ。村は、自分の持つやさしさをファビアンに拒むのだ。そうだ、この村を征服するがために

は、ファビアンは、まず自分の行動をあきらめなければならないのだ。

小休止の十分間が過ぎたとき、ファビアンはまた出発しなければならなかった。

彼はサン・ジュリアンをかえり見た。それはすでに一にぎりの光でしかなかった、やがて星、やがてこの世の最後に、彼の心を誘った浮世のほこりも消え失せた。

「もう計器板が見えなくなった。点灯だ」

彼はスイッチを入れた、ところが操縦席の赤ランプはまだ、日暮れの薄青い光の中で、いかにも稀薄な光しか指針の上に投げないので、赤くは見えなかった。彼は電球の前に指をやってみた、指がほんのわずか染まった。

「まだ早すぎる」

だが夜はすでに、黒い煙のように地表から上ってきて、谷間谷間を満たしていた。平野と谷間の見分けがもうつかなかった。早くもすでに、村々には灯火がついて、彼らの星座は、お互いに呼びかわしていた。すると彼もまた、指で舷灯にまばたきさせて、村々に答えた。この灯火信号を見て、地上は緊張するらしい様子だった。それぞれの家が、その星に点火して、これを巨大な夜に向けた、海に灯台の火を向けるように。人間の生命をおおい包んでいるあらゆるものが、早くもきらめき出した。きょうという日の、夜への推移が、入り江にでもはいるかのように、静かに美しく行なわれる光景に、ファビアンは心地よくながめ入った。

彼は操縦席の椅子に頭を埋めた。指針のラジウムが光り出した。その一つ一つに、彼は数字を読んだ。彼はそのいずれにも満足だった。彼は、空中にどっかりと腰をおろした自分の姿を見いだした。彼は指で鋼鉄製の梁材に触れてみた。そしてこの金属の中を流れる生命を感じた。振動はしなかったが金属は生きていた。発動機の五百馬力が金属の中にいともおだやかな流れを生んで、その冷たさを天鵞絨の肉に変えた。またしても今、飛行中、彼は眩惑も、酩酊もなく、ただ肉体の神秘な働きだけしか感じなかった。

今も彼は自家用の宇宙を再建し、ゆっくりとくつろいで、そこに腰をすえようと肘をはった。

彼は配電板を軽くたたいて、スイッチの一つ一つに触れてみた。わずかに身じろいで、動きやすい夜が背負っているこの五トンの金属の動揺を、最もよく感じ得る位置をとたずねた。ついで、補助ランプをさぐり寄せ、また元の位置に押しやり、一度手ばなして、また握り、す

べらないと確かめてまた手ばなし、今度はハンドルの一つ一つを軽くたたき、正確に握れるよう、盲人の世界で指を訓練した。ついで、指がそれをよく覚えこんでしまうと、彼ははじめてランプをつけて、精密な機械の並んでいる操縦席の装飾にし、ダイヴィングでもするような、夜へのこの突入を標示板の上でだけ、見守った。ついで、何一つ動揺するものも、何一つ顫動するものも、何一つ震動するものもなく、ジャイロも、高度計も、発動機の回転数も安定して変化を見せないので、彼は軽い伸びをし、後頭部を座席の背中に寄せかけた、そして、説明しがたいほどの大きなよろこびを人に味わわせるあの空中の無念無想にはいった。

さて今、こうして夜警のように、夜の真っただ中にいて、彼は、夜がみせている、あの呼びかけ、あのあかり、あの不安、あれが人間の生活だと知るのだった。影の中の一つ星、あれは離れ家だ。星の一つが消えた、あれは愛の上に閉ざされる一軒の家だ。

その家はまた、悲しみの上に閉ざされたのかも知れない。いずれにしても、それは自分以外の世界に対して、信号をしなくなった家だ。ランプの前でテーブルに肘ついているあの農夫たちは、自分たちが何を希望しているものか知らない。彼らの欲望が、彼らを取り巻く巨大な夜の中を、どこまで遠く届くものか知らずにいる。それなのに、ファビアンは、千キロメートルも遠くから飛んで来て、息づく機体を、深い空気の波頭が揺り上げたり、揺り降ろしたりするときなど、また、戦争中の国家のような雷雨の多くをきり抜けてそのすきまに月明かりを探りながら飛んで来たときなど、またはそれらの灯火の一つ一つを征服でもするような気持で追い越して行くときなど、彼ファビアンはあの人たちの欲望をありありと感じるのだ。あの農夫たちは、自分たちのランプは、その貧しいテーブルを照らすだけだと思っている。だが、彼らから八十キロメートルもへだたった所で、人は早くもこの灯火の呼びかけを心に感受しているのである。あたかも彼らが無人島をめぐる海の前に立って、それを絶望的に振ってでもいるかのように。

2

こうして、パタゴニアから、チリーから、パラグゥイから、三つの別な郵便機が、南と、西と、北とから、ブエノス・アイレス目がけて、今しも帰還の途中にあった。ブエノス・アイレスでは、真夜中近く、欧州行の郵便機を出発させるため、これら三方面からの郵便物が空

輸されて来るのを待ちうけている。

三人の操縦士は、それぞれ箱船のように鈍重な幌の奥にうずくまって、夜の中をさまよいながら、各自の飛行に工夫をこらしていた。やがて彼らは、雷雨の、または平静な空から、この大都会のほうへと静かに降りて来ることだろう、山から降りて来る風変わりな農夫たちのような格好で。

会社の全航空路にわたる責任をその双肩にになって立つリヴィエールは、ブエノス・アイレスの着陸場を、縦横に歩き回っていた。彼は無言だ、なぜかというに、三台の飛行機が到着するまでは、彼にはきょうという日が恐ろしい。一分ごとに、電報が到着するたびに、彼は、あるものを、運命の手から奪い取り、未知の領域を縮め、配下の機体と人員を、夜の奥から岸べにまで救い出しつつある自分だと、ありありと意識するからだ。

ひとりの職工が、無電局のニュースを報告に来た。

――チリー便から、ブエノス・アイレスの灯が見えるといって来ました」

――よろしい」

やがてリヴィエールの耳に、この機の爆音が聞こえて来るはずだ。潮の干満と神秘とに満ちあふれた海が、長いあいだ翻弄していた財宝を港に引き渡すように、早くも夜が今、一機を返してよこしたのだ。しばらくしたら、他の二機も、やがて夜から取り戻されることだろう。

そうさえしたら、きょうという一日は清算される。そうさえしたら、疲れた搭乗員は、新しい搭乗員と交代して、眠りに行くはずだ。ただひとり、リヴィエールにだけ、休息は許されない、なぜかというに、そのときはまた、欧州便が彼に新しい不安を背負わせるはずだから。いつになっても、こうあるはずだった。いつになっても、こうあるはずだった。いつになっても。この年功をへた奮闘家が、はじめて今、自分が疲れていると知って驚くのだ。機の到着は、戦争を終息させ、幸福な平和時代を開始するあの勝利とは似もつかない。彼にとっては、すでにしるされた同じような、千の足跡の前方にしるされる一つの足跡以外には、ついに何事も成就されるということはあり得ない。リヴィエールには、自分が、長いあいだ、重い物体を差し上げ続けて来たような気がする。いわば、休む間もなければ、果てる希望とてもないこれは努力なのだ。「ぼくは老いてきた……」行動自体のうちに彼が自分の糧を見いださないということは老いた証拠のように思われた。いまだかつて、ただの一度も思ったこともないような、こんな問題に心を労している自分にふと気づいて、彼は驚いた。それにもかかわら

ず、彼がこれまで絶えず押し退けてきた、やさしいもの集まりが、目に見えない大洋のように、憂欝な響きを立てて、彼に向かって押し寄せて来るのであった。「それらのものが、かくまでに身近に迫っているのか？……」彼は、今思い知った、自分が、すべて人間の生活を優しくしてくれるものを、老後のほうへ、「やがて自分に余暇のできるとき」へと、少しずつ押しやって来ていたのだと。なにか、実際に、やがていつの日か、自分に余暇ができ、一生の終わりに近く、自分が想像しているような幸福な平和が得られでもするかのように。ところが、平和はいつになってもないはずだった。勝利もないかも知れないのだ。なぜかというに、あらゆる郵便物が、ことごとく到着し尽くすということは絶対にないはずだから。

老職工長のルルーの前で、リヴィエールは立ち止まった。ルルー、彼もまた、四十年来働き続けてきた。労働に彼はあらゆる力を捧げてきた。毎晩、十時十二時になって、彼はうちへ帰るのだが、そこに彼を待っているのは、次元の新しい世界でも、また彼の気持を変えてくれる脱出の世界でもなかった。温厚な顔をあげて、青黒く油のにじんだプロペラー・ボスを指さしながら、「固く食い込んでいやがったが、やっとはずれやしたよ」と叫ぶこの男に、リヴィエールは微笑を返した。「工場へ命令して、こんな機械はもっと楽に組み立てるようにしなければなるまい」彼は指で食い込んでいた跡にさわって見たが、やがてふたたび、ルルーをじっと見守った。彼の顔のいかめしいしわを見ていると、妙な質問が唇にのぼってきた。彼は自分でもおかしかった。

――ルルー、きみは一生のあいだに、色恋に力を入れたことがあったかい？

――色恋ですかい、旦那、何しろどうも……」

――きみもぼくと同じだ。きみにも時間がなかったのだ……」

――とにかくどうも……」

リヴィエールは、その声の響きをじっと聞いた。答えが苦味を帯びているか、知ろうとして。ところが、答えに、苦味はなかった。この老人は、自分の過去の生活に対して、立派な板を一枚みがき上げた指物師の澄んだ満足「これで、仕上がった」というあの尊い気持を感じている。

「ぼくの一生も、どうやらこれで仕上がった」とリヴィエールは思った。

疲労に原因する自分のさびしさを、全部おし片づけて、彼は格納庫のほうへと歩き出した、チリー機がうな

りを立てて近づいて来たので。

3

遠い発動機の響きが、いよいよはげしくなって来た。響きはだんだん熟してきた。場内に照明灯がついた。目まぐるしい赤電灯が、格納庫、無電塔、四角で表示した着陸位置などを表示した。祝祭の準備さながらに。

――来たよう！」

機はすでに探照灯の光芒の中を飛んでいた。あまりに輝かしいので、新しくさえ見えた。ところで、最後に、格納庫の前へ来て、機が止まり、人夫や職工がどやどやはいり込んで、郵便物をおろし始めるときになっても、操縦士ベルランは動こうとしなかった。

――おい？　なぜ降りないのさ？」

何か神秘な仕事に没頭しているらしい操縦士は、答えようともしなかった。どうやら彼は自分の中を通りすぎる飛行中の物音の一つ一つに聞き惚れているらしかった。彼は静かに頭を振って、前かがみになり、手で何物かを操るらしい様子をした。最後に、彼は、自分の上役や同僚のほうへ向き直って、自分の所有物でも見まわすように、しかつめらしくながめ回した。彼は彼らを数え、計画するらしかった。彼は考えているらしかった、よくも自分がこれらの人びとを、この祝祭のように点灯した格納庫を、またこの堅牢なコンクリートを、またむこうにあって、そのにぎわいと、その女たちと、その熱気とを秘めたあの都会とをかち得たものだと。彼はその大きな両手のうちに、これらの人びとを、今や、自分の所有物として納めていた。なぜなら、彼らにふれることも、彼らの声を聞くことも、彼らをののしることも彼にできたから。彼は最初まず、彼らがあのように安泰な生活に安んじて月をながめたりしていることを、ののしってやりたかった。ところが彼は優しすぎた。

――……おごってもらおうぜ！」

いいおわると、彼は機から飛び降りた。

彼はきょうの飛行について語りたかった、

――きょうはきみ！……」

これだけいってしまうと、もう十分だとでも思ったか、彼は革の飛行服を脱ぎに行った。

陰気なひとりの監督と、黙り屋のリヴィエールといっしょに、彼を乗せた車がブエノス・アイレスへ向かって走り出すと、彼はさびしくなってきた。なるほど、困難とたたかってこれを切り抜けることも、また着陸するといきなり、気持よく元気な悪態を口から吐き出すことも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb